
平成31年度 第2回午後

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

平成31年2月2日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外^{ほか}のものを置いてはいけません。受験生^{くせんせい}どうしの貸し借り^{かかしかり}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は21ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

〔一〕 次の文章は吉田夏彦よしだ なつひこ『なぜと問うのはなぜだろう』の一部である。これを読んで、後の設問に答えなさい。

まえにもいったように、てつがく哲学と科学とは、もともと一つのものでした。

哲学も科学も、人間の好奇心こうきしんをみたすために、発展させられてきたともいえるヨーロッパ派の学問です。それが一般的いっぱんてきに、哲学とも、科学とも、よばれてきたのです。

では、どういうところで、哲学と科学とが区別されるようになってきたのでしょうか。これについてはいろいろな考え方がありますが、この本では、いちおう、つぎのように説明するところから、話をすすめていきたいと思います。

好奇心をみたすために、人間は、根ほり葉ほり、いろいろなことをたずねます。しかし、その質問は、つづけようによつては、きりがなくなってしまう。

たとえば、「空はなぜ青くて赤くないのか」という疑問を持った人が、科学者のところに質問にいったとします。科学者は、親切に、いろいろと説明してくれるでしょう。そうしてそのためには、物理学の理論を持ち出してくるようになります。

しかし、「それでは、なぜ物理学の理論をひきあいに出して説明すれば、正しい説明になるのか」という疑問をつづけて出すとしたらどうでしょうか。

そのとき、なお説明をつづけてくれる科学者もいるでしょうが、人によっては、「それは哲学の問題です。科学者の答えることではありません」という人もいることだと思えます。

じつさい、①科学者にこういふ質問をして、こういふ答えをもらい、それではというので哲学を勉強するようになった人がいるのです。

つまり、科学は、好奇心をみたしてくれませんが、それにはかぎりがあるのです。

科学はどんな質問をしても答えを出してくれるというものではなく、「そこからさきは、きかれても困るんだ」という

ところが、科学にはかならずあるのです。

そうして、それでもそのさきが好きという人には、哲学が待っているというわけです。

たとえていえば、好奇心の強い人が、科学という車にのって、いろいろな疑問についての答えをさがして行くと、ここからさきは科学的にはきいてもむだだ、という赤信号がたつているところにぶつかるところがあるのです。

では、哲学という車にのりかえれば、そこで信号機は青を出してくれるでしょうか。かならずしも、そうとばかりはいきれません。哲学に科学で答えられないことが答えられたとしたら、はじめから、科学などはやらなくて哲学をやればよさそうなものです。

たとえば、ガリレオやニュートンの時代になるまえに、自然のことについてしらべていた学者、そうして、いまでは科
学者のなかまには数えられない学者の中には、科学が答えられないような疑問にも、どんどん答えを出していた人がいました。
しかし、そういう答えは空想的なものだとして、いまでは信用されなくなっています。

つまり、②赤信号の前で科学がとまるのには、それだけの意味があるのです。

科学の成功の秘密は、なにもかも答えようとはしないで、赤信号のたつているところがあることに気がついた点にある
とさえいえるぐらいです。

だから、むやみに赤信号の前にとびだそうとしても、話が空まわりになってしまうことが多いのです。

科学が、③哲学からわかるまえのほらぶき学者のやり方に、もういっぺんかえろうとしても、あまり意味はないこと
になりそうです。

しかし、なぜ、赤信号がたつているのかしら、という疑問を持つことはできるでしょう。

また、科学に答えられない問いというものは、どんなことをしても答えられないものなのか、それとも、科学が、それ
より以前の学問をのりこえて発展してきたように、科学をのりこえるもつとさきの学問があるのだろうか、という疑問も
わいてくるでしょう。

つまり、ここで、人は、一つの答えにくい問いにぶつかったことをきっかけにして、「人間がものを知るとはどういうことか。その、知るということには、そこから先にはどうしても行けない、きりというものがあるのか」という問いにぶつかるのです。哲学というのは、^④「こういつた問いに答えようとするところからはじまる学問だともいえるのです。」

つまり、ものごとを知ろうという点では科学とおなじことですが、その知ろうとすることが、科学とは少しちがう。いまの例でいえば、知ることとか、好奇心とかいったこと自体を問題にするのが哲学です。さきほどの例でいうと、^⑤赤信号を青信号にする妙薬が哲学なではありません。

むしろ、赤信号になったことをあらためて問題にして、いろいろ考えてみようというのが哲学です。その結果、思いがけないところから、まえにすすむ道が見つかるかも知れないし、やっぱり人間にはまえにすすむことができないんだ、ということもわかるかも知れない。

いわば、哲学は、まえにすすむか、とまるか、だけを考えるのではなく、おちついてまわりのことにも注意しろという、**【 X 】** 信号を出すものだともいえるのです。

そこで、学問の場合にかぎらず、いままで一つのことにならなっていた人が、なにかのきっかけで、おちついてまわりのことも考えるようになると、「あの人も哲学的になつた」ということがあるぐらいです。

問1 ——線部①「科学者にこういう質問をして、こういう答えをもらい」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 科学者に対して、空はなぜ青くて赤くないのかと質問したら、それは哲学の問題ですと言われたこと。

イ. 科学者に対して、空はなぜ青くて赤くないのかという疑問に物理学の理論で説明することはなぜ正しいのか、と聞いたら、それには答えられないと言われたこと。

ウ. 科学者に対して、空はなぜ青くて赤くないのかと質問すると、それに物理学の理論によって答えてくれたこと。

エ. 科学者に対して、空はなぜ青くて赤くないのかという疑問に物理学の理論で説明することはなぜ正しいのか、と聞いたら、親切に説明してくれたこと。

問2 ——線部②「赤信号の前で科学がとまるのには、それだけの意味があるのです」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 科学で答えられない疑問にぶつかった時には、哲学がその疑問に対する答えを出してくれるので、科学がすべての問題に答える必要はない、ということ。

イ. 科学が解きあかせない問題に出会ったとしても、時間をかけて考えていけば、やがてその壁をかべのりこえることが科学にはできる、ということ。

ウ. 科学が答えられない疑問に対しては、科学的ではないが、独自の空想によって答えを導き出す学者がいて、彼らに解決を任せればいい、ということ。

エ. 科学がすべての疑問に対して答えを出そうとすれば、話が空まわりになることもあるので、答えが出せない問題もあるのが科学だ、ということ。

問3 ——線部③「哲学からわかれるまえのほらふき学者」とありますが、このような学者について説明している一文を探し、その文の最初と最後の五文字を答えなさい。なお句読点などの記号も字数にふくめます。

問4 ——線部④「こういつた問い」とありますが、これはどのような問いのことですか。その説明をした次の文の空らんを本文中の五文字のことばで補いなさい。ただし、二つの空らん【A】には同じことばが入ります。

人間が【A】ということ自体がどういふことなのか、またそういう人間の【A】ということには限界があるのか、という問い。

問5 ——線部⑤「赤信号を青信号にする妙薬みょうやくが哲学なのではありません」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 科学が答えられないことを哲学が答えられるとは限らない、ということ。
- イ. 科学が答えられないことは哲学が答えるべきだ、ということ。
- ウ. 科学が答えられないことでも哲学なら答えられる、ということ。
- エ. 科学が答えられないことに哲学が答えられるはずがない、ということ。

問6 文中の空らん【X】を補うものとして最も適切な漢字一字を答えなさい。

問7 〓 線部 「どういうところで、哲学と科学とが区別されるようになってきたのでしょうか」とありますが、哲学と科学の区別の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 科学は、どんな問いに対してでも答えを出してくれるものである。哲学は、答えが一つではない問いを考えようとするものである。

イ. 科学も哲学も、物事を知ろうとするという点では同じであるが、哲学は、科学が立ち止まった問いに対して分かりやすい答えを出すことができるものである。

ウ. 科学は、論理的方法が使える問いに対して答えを出そうとするものである。哲学は、論理的方法を使わないことによっては、どんな問いにも答えられるものである。

エ. 科学は、好奇心をみたしてくれるが、答えられることにかぎりがあるものである。哲学は、科学の答えられないことをあらためて問題にし、そこから出発して考えるものである。

〔二〕 次の文章は中山聖子『その景色をさがして』の一部である。これを読んで、後の設問に答えなさい。

小説家だった母親「美鶴」を病気でなくし、祖父母と一緒に暮らす中学2年生の「トーコ」。クラスメートと比べて、自分には何もとりえがないと自信をなくしている。母親の妹で小児科医をしている「千紘」と休日にショッピングに出かけて、コーヒーショップに入った。

運ばれて来たパンケーキは、月刊のコミックスほどの厚みがあって、その上にトッピングされたフルーツやホイップクリームも、何かの間違いではないかと思うほどの量の多さだった。

ほかのお客さんたちの前にも、わたしたちと同じようなセットが置かれていた。

若くてきれいな女の人や、女子高生らしい集団がほとんどだったけれど、その中に、ひとときわ高い声で笑ったりしゃべったりしている、四十代くらいのおばさんたちがいた。

四人グループのその人たちは、ちよつと派手なストールを巻いたり、大きめのネックレスを身につけたりしていて、華やかな感じだった。

ママはあんなふうに、誰かとお茶に出かけたり、ランチに行ったりすることがほとんどなかった。

わたしは、その人たちばかりに目がいった。

「まったく、誰のおかげで大きくなったと思ってるんだか」「本当にね、うちの子もすごく**ナマイキ**よ。娘って、母親のことをよく見てるんだから」「そうそう。それで、言うことがいちいち鋭いの。心にグサツとくること、平気で言うんだもの」「うちは男の子だから、そういうことはないんだけど……」

そんな話し声が、聞く気はなくても耳に入ってくる。

おばさんたちは、ママと同じ歳くらいだから、子どももわたしと同じくらいなのだろう。時々、すごく楽しそうに笑ったり、「ね」「ねーえ」と声を揃えて言ったりもした。

「トーコ」

千紘ちゃんが、わたしを呼んだ。

千紘ちゃんのお皿の上に、パンケーキはもうほとんど残っていない。わたしは、自分でも気づかないうちに、ずいぶん長い間、おばさんたちを見ていたらしい。

「トーコ、大丈夫？」

千紘ちゃんはそう言うってから、最後のひとかけを口にした。わたしも千紘ちゃんに合わせようと、フルーツを載せて、口いっぱい頬ばった。

そして、残りを味わいながら食べ終えてから、

「あのね」

と言った。

「①わたし、ママにひどいことを言ったんだ。一年くらい前……」

千紘ちゃんは、黙ってコーヒーカップに口をつけたまま、ちよつと上目づかいでわたしを見た。

「ほんとに、すごくひどいこと」

わたしが繰り返すと、千紘ちゃんはカップを置いて、

「どんな？」と聞いた。

「『わたしなんて、産まなきゃよかったの』とか、『わたしなんて必要ないじゃん』とか、そんな感じのこと。だってママ、自分の病氣のことを、パパに知らせないで欲しいって言うんだもん。パパには心配や迷惑をかけられないからって。でも、じゃあ、わたしの気持ちはどうなるのって、すごく悲しくなって、腹が立って」

わたしは、グラスの中の氷を、ストローでカランと回して。

「そう」

「でもママなんて、わたしよりもっとひどいよ。『わたしは、トーコを産んだなんて思っていないよ。トーコはただ、自分の力で生まれて来てくれた』なんて言うんだから」

千紘ちゃんは、

「へえ、美鶴ちゃんもけっこう強いね」

と言って笑ったけれど、わたしがちつとも笑わずにいたら、

「あ、すみません」

と、真顔になった。

「わたし、ずっと前から考えてたの。ママには好きな仕事があって、パパは新しい奥さんおくと結婚けっこんをした。ママとパパの人生はもうまったく違うものになってしまって、ふたりの結婚なんて、意味のないことだったわけでしょう？ お互たがいが、運命の人じゃなかったってことでしょう？ そういう、意味のないふたりの間に生まれたわたしは、何なんだろうって。

つまり、神様の手違い的な、そういうことで生まれて来たんじゃないのかなって」

「はあ……」

「ママが病気になってからは、もっと考えるようになったし、時々すぐムカつくようにもなった。ママもパパも、わたしにこんな悲しい思いをさせて、ひど過ぎる、自分勝手だつて。そして、そんなふうに分勝手に生きられるのは、ふたりがわたしのことを、そんなに愛していないからなんだろうかって思っちゃうんだ。たぶん、わたしは根っこねっこの所から、自分に自信がないの、全然」

わたしはそう話しながら、千紘ちゃんが「そんなことないよ、トーコは愛されてるよ、自信を持ちなよ」と言ってくれたのを待っていた。いつも以上に動く口を止められないのは、たぶん千紘ちゃんちづなちゃんへの、甘えあまだったのだと思う。

「あら、もうこんな時間。子どもを塾じゅくに送って行かなきゃ」「えっ、ほんとだ。わたしもそろそろ」「楽しかったわねえ」「ねえ」と言いながら、おばさんたちのグループが立ち上がり、支払いしはらを③**入ませ**て店を出て行った。

少だけ静かになった店内で「そんなことないよ」と、やさしく言ってくれるはずだった千紘ちゃんは、思いのほかクールに、

「③トローコつて、けつこう面倒めんどうくさいね」

と言った。

「自分が生まれて来たことの意味なんて、考えたってしかたないじゃない。泣いても笑っても、そこからスタートするしかないんだから。それより、これから生きていくことの中で起こる、ひとつひとつのことが、大切だと思うんだだけ」

わたしは、少しムツとした。そんなこと言えるのは、千紘ちゃんが賢いかしこからだ。

千紘ちゃんみたいに、みんなから「先生」と呼ばれる仕事についていて、彼氏かれしはいなくても毎日充実じゅうじつしていたら、わたしだってそう思えるのかもしれない。

ただどわたしは、何をやっても中途半端ちゆうはんぱで、自慢じまんできるようなことはひとつも無い。どこにでもいる、平凡へいぼんでつまらない、ひと筆書きの女子中学生なのだ。

氷が溶とけて薄うすくなってしまうアイスティーを、ストローで思いっきり吸った。喉のどから胸にかけて、スーッと冷たくなっていく。千紘ちゃんも、水滴すいてきがたくさんついているウォーターグラスを傾かたむけて、

「ねえトローコ、わたしがなんで医者になったか知ってる？」
と言った。

わたしは、自分の心の中がわかってしまったのだろうか、ドキッとした。

わたしが首を横よこに振ると、千紘ちゃんは、

「ほら、美鶴ちゃんって、ちよつと変わってたじゃない？」
と話し始めた。

「子どもの頃からそうだったの。悪気はないんだろうけど、その場の空気を読めなかったり、ついよけいなことを言っちゃったりして。たぶんそれで、周りの子どもたちと、あまりうまくいかなかったんだろうね。いつもひとりで部屋にこもって、本ばかり読んでたの」

「ふうん」

わたしはママのことを思い出し、軽い気持ちで頷いた。だけど、そのあとの千紘ちゃんの言葉には、とても大きなショックを受けた。

「これはね、大人になってからおばあちゃんに聞いたことなんだけど、美鶴ちゃん、中学生の時に、ずいぶんいじめられてたんだって。たしか、作文で大きな賞をもらってから」

「えっ？」

わたしが目を見開くと、千紘ちゃんは口を一文字に結んで「ん」と頷いた。

「まあでも、わたしたちは年が離れていたし、どんなことがあったのかは、よく知らないんだけどね」
そう言って、千紘ちゃんは一瞬視線を泳がせた。④大人のくせに、嘘をつくのが下手だと思う。

「本当は知ってるよね？どんなことがあったのか」

「いや、知らない」

「知ってるでしょ？」

「……ちよつとだけ」

「じゃあ、ちゃんと教えてよ」

わたしはそう言っただけで、心の奥では、知りたくないとも思っていた。だけど今、何もかも聞いておかなければ、そ

のうちもやもやした気持ちになるのはわかっている。

だからわたしは、

「ここまで話しておいて、やめないですよ」

と、強く言った。

千紘ちゃんは、小さな声で「だよねえ」とつぶやくと、思い切ったように話を続けた。

「あのね、ある時から美鶴ちゃん、すごく長い時間お風呂ふろに入るようになったんだって。一時間とか、二時間以上も。それで、どうしてだろうって心配したおばあちゃんがしつこく問い詰めたら、わたし、臭くさいからって、答えたそうなの。学校で臭いって言われているから、一生懸命洗いっしょうけんめいってるんだけど、ねえわたし、もう大丈夫かなあって、すごく不安そうな顔で聞いたんだって。おばあちゃんはその前にも、美鶴ちゃんの体操服の背中に靴跡くつあとがついているのを見つけて気になっていたから、ああ、そういうことなのかって、思ったらしいよ」

ふいに、ママの笑顔が頭に浮うかんだ。「トーコ、トーコ」とわたしを呼ぶ声や、温かくてすべすべした手の感触かんじよくも思い出した。

「当たり前のことだけど、おじいちゃんもおばあちゃんも、ものすごくショックだったんだって。真まつ暗やみな闇やみの中に、ずんずん沈しずんで行くような気がしたって言った。とにかく先生に相談したんだけど、それがかえって悪い方ほうに向かったらどうしようって心配して、不安になって。美鶴ちゃんは、そのうち食べたものを吐はくようになって、ずいぶん瘦やせたの」

「……それで？」

「それでおしまい。いじめっ子が**ゲキテキ**にいい子になるわけもないし、美鶴ちゃんはガリガリに痩せちゃって、学校を休みがちになりながら、それでもなんとか卒業……」

ふいに、千紘ちゃんの言葉が止まった。

千紘ちゃんはわたしから目をそらし、しゅんつと鼻をすすって顔を上げると、天井てんじょうで回まわる※シーリングファンをしばらく

く見つめた。

ふたたびわたしの方に向いた時、⑤千紘ちゃんの目は涙で潤んでいて。それから大きく息を吸い、ふーっと吐くと、また口を開いた。

「美鶴ちゃん、わざわざ遠くの高校を受験して入学して、そこでは、いじめられるようなことはなかったらしいよ。大学に入ってからは、友達もできたみたい。それで、大学を卒業する頃になって、ふっと小説の新人賞をとったんだよね。それまで、美鶴ちゃんが小説を書いていたことも、それを文芸誌に投稿していたことも、わたしたちはぜんぜん知らなくて、とにかくびっくりよ。美鶴ちゃん、大きなホテルであった授賞式にわたしたちを連れて行ってくれたんだけど、わたし、あんなにきれいな美鶴ちゃんを見たの、初めてだった」

「あ、その時の写真、見たことあるよ。いっだったか、おばあちゃんが見せてくれた。真っ白いブラウスに、ラベンダー色のスカートをはいて笑ってる写真。ピンクパールのネックレスもつけてて、ママ、④ジヨウウさんみたいだった」

「そうなの、あの時の美鶴ちゃんは、本当にキラキラしてた。美鶴ちゃん、それまではずっと、手のかかる変わった子っていう扱いだっただのに、新人賞をとったとたん、個性的でおもしろい子、に進化しちゃった。でもね、それとは逆に、それまではしっかり者で、勉強ができる良い子だったわたしは、ただ勉強ができるだけの平凡な子、になっちゃった」

千紘ちゃんは、もう一度水をゴクンと飲んで「はっ」と笑った。

「何なんだろうと思ったよ。おじいちゃんとおばあちゃん、それまでは腫れ物に触るみたいに接していたのに、急に美鶴ちゃんをかまいた始めて。わたしが、嫉妬の炎をメラメラ⑤モヤしている横で、美鶴ちゃんたら、やっと自分にもやりたいことが見つかった、なんて言っちゃって。話し方や表情まで明るくなって……。わたし、置いて行かれたみたいで、ちよつと悔しかったんだよね」

⑥「なんだ、千紘ちゃんだって面倒くさいじゃん」

「あ、たしかに」

と言って、千紘ちゃんは目と口を丸く開いた。

「でもね、ここで勉強をやめちゃったら、わたしはもつと自信を失ってしまうと思ったの。だからとにかく勉強をした。するしかなかったのよ、美鶴ちゃんに対抗たいこうするには。そうしたら先生に、この**（☆）セイセキ**なら医学部にも入れますねって言われて、入れるんなら入ってやろうって、それで医者になったの。もちろん、それだけが理由じゃないけどね」

「千紘ちゃん、すごい」

「すごいよ、わたし。けっこう努力家なんだから、本当に」

「うん」

「**（◎）**でもね、最近さいじんになって思うんだ。生き生きと変わっていったように見えた美鶴ちゃんも、本当は**（◎）ヒッシ**だったんだろくなって。いじめられてた時の記憶きおくって、**（☆）カント**に消えるものではないだろうし。周りから浮ういてしまう自分のこと、わたしたちが思う以上に、いやだっただろうし……。いつだったかトーコ、美鶴ちゃんの書く小説が、普通ふつうで退屈たいくつだって言ってたけど」

「うん、言った」

「わたしはね、美鶴ちゃんの書くもの、好きなんだ。普通の生活の中から、ちょっとしたすてきなことをすくいあげて、どんな登場人物にも、やさしく寄り添よってそいて。そういうのって、つらいことをいっぱい**（☆）ケイケン**した美鶴ちゃんだからこそ、書けたんじゃないかと思うの。美鶴ちゃんは、きっと物語を書くことで、どうしようもなくいやな思い出や、くすんだ気持ちにも、意味を持たせようとしてたんじゃないかって、思うんだ」

「うん」

「みんな、自分に自信なんてないんだよ」

「……そう、なのかな？」

「少なくとも、わたしにはないね」

千紘ちゃんが話をやめると、とたんに店内に流れる曲や、ざわざわとした話し声が入るようになった。

おしゃべりしながら笑っている、**㊦** **セイフク**を着た女子高生たちの一人ひとりも、千紘ちゃんが言ったような気持ちを抱^{かか}えていたりするのだろうか。

※シーリングファン：天井^{てんじょう}にとりつけられた扇^{せん}風^{ふう}機^き

問1 — 線部(一)～(十)のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| (一) ナマイキ | (二) スませて | (三) ゲキテキ | (四) ジョユウ | (五) モやして |
| (六) セイセキ | (七) ヒッシ | (八) カンタン | (九) ケイケン | (十) セイフク |

問2 — 線部①「わたし、ママにひどいこと言ったんだ」とありますが、トコはなぜひどいことを言ったのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. ママもパパもトコの気持ちも考えずに勝手にそれぞれの道を進んでいるが、自分にはそういう力がまるでないと、いらだっていたから。

イ. ママにはふだんからトコはひとりで生きていけると言われていたが、そんな強さは自分にはないということをママに伝えたいと思ったから。

ウ. ママがパパと違う道を進もうとしたときに、トコに全く相談をしなかったことでママに対する怒りをおさえられなくなつたから。

エ. ママの病気でトコは心細さを感じていたが、パパへの連絡を止められたことで、自分の心細さはどうでもいいとママが思っているように感じられたから。

問3 ——線部②「千紘ちひろちゃんへの、甘えあま」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 病気のママにひどいことを言ってしまったのを後悔こうかいしていることを千紘に打ち明けければ、「ママはそんなこと気にしてないよ」、と言ってもらえると思っていたこと。

イ. ママにひどいことを言ったのを告白することで、ママを失った悲しさに共感してもらい、一人ぼっちになってしまったつらい思いを少しでも軽くしたいと思っていたこと。

ウ. 病気で亡くなったママから、パパには連絡を取らないでほしいと言われていたので、千紘に両親の代わりになってほしいと思っていたこと。

エ. それぞれ自分勝手に人生を歩んでいたママとパパが、わが子を本当に愛していたのか疑問に思われて、そのせいで何をやっても自信を持ってない自分を、千紘ならはげましてくれらると思っていたこと。

問4 — 線部③ 「トーコってけっこう面倒くさいよね」とありますが、なぜ千紘は「面倒くさい」と思ったのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 両親が離婚したことにこだわると、自分の存在には意味がないのではないかと考えて、前向きになれなくなっているから。

イ. トーコは、ママが病気になると自分はどうなるのかと不安になり、冷静さをうしななって周囲に対しても感情的になっているから。

ウ. 両親が離婚してパパとはなればなれになり、ママも病気になってしまったトーコは、だれかれかまわず自分のなやみをぶつけてくるから。

エ. トーコは両親の離婚をきっかけにして、結婚とか人の誕生とかの意味を神様という存在にからめて考えようとしているから。

問5 — 線部④ 「大人のくせに、嘘をつくのが下手だと思う」とありますが、千紘が言ったことのような点が嘘なのですか。次の文の空らんを二十五字以内で補い、その説明を完成させなさい。なお句読点などの記号も字数にふくめます。

「トーコの母が 。」と言った点。

問6 ——線部⑤「千紘ちゃんの目は涙で潤なみたうるんでいた」とありますが、なぜ千紘の目は「涙で潤んでいた」のですか、その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 母親を亡くしたトーコがづらい気持ちでなやんでいることを改めて感じ、同情したから。

イ. 姉の美鶴みづるがひどいいじめを乗りこえるのに、どれだけがんばっていたのだろうと思うと悲しくなったから。

ウ. 姉の美鶴に嫉妬しとしている自分の気持ちを両親は知りながら、自分をかまってくれなくなったことを思い出したから。

エ. 姉の美鶴がいじめられていたことを知った時に、すぐ行動して助けることができなかつた自分が嫌いやになつたから。

問7 ——線部⑥「なんだ、千紘ちゃんだつて面倒くさいじゃん」とありますが、トーコは千紘のどのような点を「面倒くさい」というのですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 姉が新人賞をとるまでは自分は勉強のできる良い子だと思つていたのに、姉が賞をとると自分は勉強ができるだけの平凡へいぼんな子にすぎないと、自分自身を見下してしまう点。

イ. それまで勉強ができるということで姉をリードしていたはずの自分が、姉の受賞によって追いつめられたように思い、そこから自分も負けないようにさらに努力した点。

ウ. いじめられた経験もある姉が小説新人賞をきっかけに明るくなって自信を持つていったことは喜ばしいことなのに、その姉から取り残されたように思つてしまった点。

エ. 変わり者の姉より勉強のできる自分の方を両親がかわいがっている時は、そのことについて何も思わなかつたのに、その位置が逆転すると親に対して不平不満をつのらせている点。

問8 —線部⑦「でもね、最近になって思うんだ」で始まる千紘の話で、千紘がトーコに伝えたかったことはどういうことですか。六十字以内で分かりやすく答えなさい。なお句読点などの記号も字数にふくめます。

(おわり)

